

北海道アイヌを中心としたかぶりものについての研究

諏訪原貴子, 鷹司綸子

Research of headdress focused on Hokkaido Ainu

Takako SUWABARA and Kumiko TAKATSUKASA

キーワード：かぶりもの、アイヌ、文様、呪術、お守り

序 論

これまで北海道アイヌ・樺太アイヌ・千島アイヌの衣生活に注目し、その文化は北海道を囲む中国大陸・アムール地方と関係があり、その上に交易や移住によってアイヌ文化が定着して成立していったことを研究してきた。その中で道内において、衣服の分布は、和人との交流やアイヌ同士の結婚による移住によってはっきりと分布され、その衣服の文様の持つ意味も地方ごとに異なっていることを明らかにしてきた¹⁾。

今回はアイヌ民族の“かぶりもの”に注目し研究を進めていく。

一般的に“かぶりもの”頭部に着想する服物の総称で、防寒・防暑など頭部の保護のために、あるいは整容・儀礼など頭部の装飾のために用いられるものである²⁾。

「アイヌ人が用いる被り物は、女子は顔に毛がかからないように、手ぬぐいで鉢巻をすることもある。樺太アイヌは、この鉢巻を特に環状に織って頭にはめる。冬期には、男女ともに木綿の被り物をする。」³⁾

と書かれている。

ユーカラ Kina chishinap Mun chishinap (草人形・くさひとかた)⁴⁾には、

抜) 祖母の宝入れのかますを

……祖母のかますを開けたのである。

……中から 小袖を出し 神々しい冠り物……

……神々しい冠り物を 頭へ高く いただく。これが悠々 風采を挙げ 昇天する 神のように……⁵⁾

と、うたわれている。

また、「知里真志保著作集 別巻Ⅱ分類アイヌ語辞典 人間編」⁶⁾で意味を調べると“かぶ

る”、“巻く”という意味はなく、頭の部位に関する意味として

「あたま：狭い額は悪相とされている。狭い額のところがちょっとおしつぶれたようになっている醜い女。額の広いものは賢く、額の狭いものは愚かである。」⁷⁾

「髪」に関しては

「髪：美女の頭髮の形容に「渦巻きになって草の蔓のようになっていくという」西洋流に波打った巻き毛を結ぶのである。髪はといえば、蔓草のように垂れ、渦巻きのように垂れ、その髪の毛のさきわびがぴかぴか光っていて髪の毛の表面に金色の水がしたたり流れていて、人間であろうか、その美しいこと。

略 「髪容（かみかたち）：神・髪について今の部落の古老は美しい髪というふうに理解している。」⁸⁾

と、書かれている。アイヌ民族にとって頭や髪は自分たちの精神面を映しだし、容姿を象徴するための一部であることがあげられるのである。

アイヌ民族にとって“かぶる”という意味合いや、鉢巻意外にどのような“かぶりもの”があげられるのであろうか、北海道アイヌを中心に交流や地域性からかぶりものの種類やその形状の意味について全体像の現状を考察していく。

方 法

かぶりものに関する種類をあげるために、総合的な文献として「アイヌ民族誌」（第一法規 1969）⁹⁾を参考にした。これは和人が調査して書かれたものであり、アイヌ民族にとって興味を持った人たちに対し彼らが受け入れやすいように統合して説明している。

アイヌ民族は口承伝承で自分たちの生活を自ら記録に残すことはしなかったので文献はもちろん実物資料の残存も厳しいのが現状である。実物資料も復元品がほとんどで、それも製作年代や、製作者、収集地もはっきりとしていない。

上記文献資料の他、和人の残した紀行文、博物館所蔵資料目録¹⁰⁾、聞き取り調査によって一覧表を製作し資料分析を試みた。

また実物資料の製作年代や目録などからの容姿がはっきりとしないなかで、製作者や描写年代がわかるアイヌ絵を用いての分析も合わせて考察する。生活文化を知る上での資料として貴重なアイヌ絵は和人が蝦夷地を開拓調査や旅行、移住してきて描かれたものである。知識階級による北辺の蝦夷地への好奇心があったということは言うまでもない。

今回、小樽市博物館にて特別展「描かれた岸辺のアイヌ—旅の絵師がのこしたスケッチ—」¹¹⁾が開催され、アイヌ絵の原稿でもある墨絵が発見された。この墨絵は当時（江戸末か

ら明治初期?)のアイヌ風俗画の中では極めて珍しい、「見て描く」ことをしているもので、手の動き、髭のかたち、わらじの結び方にいたるまで、ときには説明書きを添えながら非常に克明に描写されていた。本論文を考察する上で大変貴重なものである。

1 かぶりものの分布

かぶりものの分布を資料1に表した。(参照)

かぶりものの種類として調査資料一覧の項目より「礼冠」「笠」「鉢巻」「頭巾」「帽子」をあげ、収集地や製作地から各々のかぶりものが見られた地域として考察する。

調査資料より“かぶりもの”をもつ地域と民族は、北海道・サハリン(アイヌ)、サハリン(ウィルタ)、ロシア(ウデヘ・オロチ・ウリチ・ナーナイ・その他アムール川周辺民族)があげられた。

調査地域全体に見られるかぶりものは、鉢巻、頭巾、帽子で、北海道では笠が収集されていない。一方、礼冠は北海道で多く見られる。

それぞれの調査資料の数のばらつきや、収集地の確認が困難な資料もあり、その中で地域性や民族によって使われるかぶりものが異なっていることがわかる。

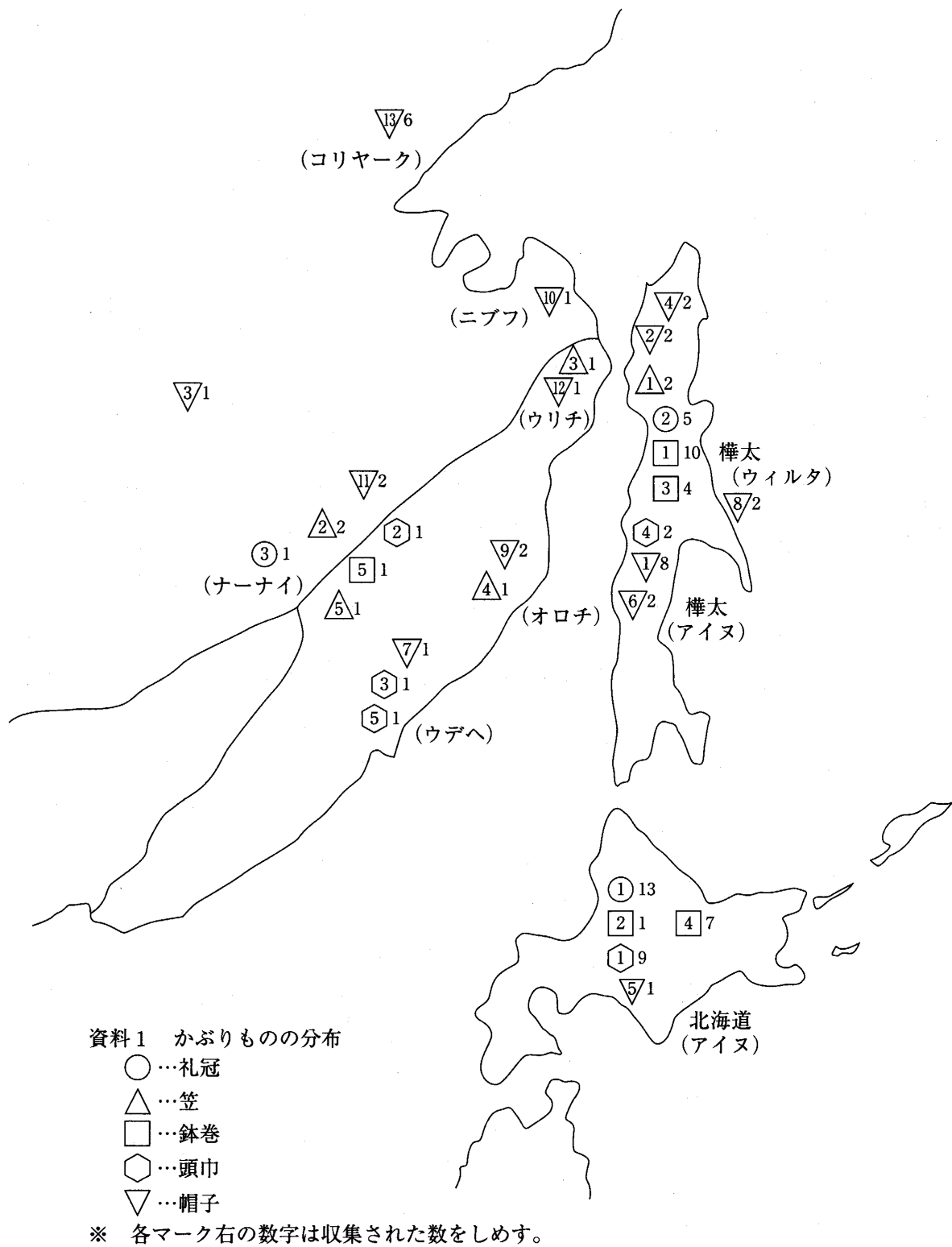
鉢巻、頭巾、帽子は調査地域全域に見られる。これらの素材は樹皮や木綿、毛皮である。北海道地域はことに頭巾が多く、木綿や樹皮を使い中綿が入っているものが多い。和人の使用する頭巾に形が大変似ている。本州の和人との交流が多いために和ん文化の影響により発展したと考えられる。

樺太やアムール川周辺地域では、鉢巻や帽子に水鳥、鹿、トナカイ、ウサギなどの毛皮を用いていることが多い。極寒な気候風土に対応するためと、狩猟民族の特性からと考えられる。北海道アイヌも狩猟民族であるが、交易によって彼らは毛皮の多くを輸出し、その代償として木綿や絹を手に入れてきたのである。

礼冠は主に北海道地域に見られる。資料2、3より使用者も北海道アイヌ・樺太アイヌが多く、他地域でもシャーマンのみ着用される。北海道アイヌの場合、熊送りの儀式の時のみかぶるという事例があり、呪術的要素をもつ民族の限定と地域性がはっきりと見受けられる。逆に、笠は北海道ではあまり分布せず、樺太、アムール川周辺地域に多く見られる。これらの地域ではかつて山丹交易が行われていた。これを背景に笠を山丹笠とも称するようになったとも考えられるのである。

2 かぶりものの種類と特徴

「礼冠」「笠」「鉢巻」「頭巾」「帽子」を項目別に分類し、その個々の特徴などを資料2、3で一覧表にまとめた。これらの“かぶりもの”は生活の中でどのような役割と意味をもつ



ているのか検討していく。

2-1 礼冠（サパウンベ）

アイヌの男が熊送りなどの儀式に参加する時にかぶる冠である。

『蝦夷島奇観』¹²⁾（資料4）に、

蝦夷うち聚りて神を祭る時は真の大禮なり。其時酋長たる男夷冠（シャハンベ）をいただき（抜）

此器蝦夷人の冠なり。熊祭りなどの大禮の節ハおのおの是を着せり。シャバは頭の称、ウはあつむる語、ベは器といふ意なり。木幣を作る如く木を削かけにして組製する也。

トミサンベツといへる呼造曲（浄瑠璃）に神霊授け給ふ事を傳ふ。（抜）

『北海土人画譚』¹³⁾に

容姿：国後にて蝦夷人うち集りて神を祭るときは実に大礼なりその時の酋長たる男夷冠をいただき……（抜）

と酋長だけが盛装のときに必ず被るものであり、素材や作り方も書かれ、日常に使われるものではなく特別に神聖な物として扱われている。

木皮で編んだ輪が基本で、前面には一番大切な神としてあがめる、熊・狼・鳥の木彫りがつけられている。この頭飾りの前方先端に取りつけられている動物を象った彫り物や動物の一部などは、古くは動物祖先神の象徴であり、男性の系統を物語るものであったと憶測されている。しかし日高地方静内での聞き取り調査によれば、「動物を象った彫り物を礼冠につけることはなかった」現存する静内以外で収集された礼冠の資料を見て頂くと「こんなに種類があったものか」と意外な回答が得られた。

『蝦夷島奇観』に、

古例なりきと云。予享和改元のとし西北夷地に至り 々の酋長にきゝしに、北濱シャリの邊には、今猶其形状すこし残れり。（抜）

と書かれ、聞き取り調査でも考察できるように、地方によって差異が見られるのである。

樺太やアムール川周辺地域のウリチ族、ナーナイ族でも礼冠が見られた。北海道アイヌのものとは形が異なり、前方に彫り物は見られない。幅も細く後頭部に垂れるものが北海道のものより大変長い。兜のしころから影響を受けたとも言われている¹⁴⁾。シャーマンの被り物も細い縄で編まれ後に長く垂れている。葡萄の蔓や、シナノキの繊維の代用品として、芯をラッコやアザラシ皮にしたり、十字の紐を頭頂部に渡したりしているのも特徴である。

2-2 笠

北海道アイヌには使用が見られない。北海道アイヌは降雨にも笠を戴かず山へ入っていつ

資料2 “かぶりもの” 一覧

項目	収集地	素材・材料	年代	使用者	備 考
礼 冠	北海道	ブドウ蔓・ミズキ		北海道アイヌ	ブドウ蔓をミズキで束ね、布片がつく。
	北海道	ガマ・ミズキ		北海道アイヌ	ガマで幅広に編まれ、輪を囲むようにミズキがのせられる。
	北海道	ブドウ蔓?		北海道アイヌ	輪状の周囲に細い縄で編んだものがたくさんつけられる。布片が多くつけられている。
	北海道	ブドウ蔓・ミズキ		北海道アイヌ	編むことはせず、ただ蔓をまとめてミズキで縛り上げたもの。
	北海道	ブドウ蔓		北海道アイヌ	ブドウ蔓で細い縄を作りそれを束にまとめ輪にする。かなり装飾的要素を意識している。
	北海道	ミズキ・クマ皮		北海道アイヌ	ミズキで輪を作り、その下にクマ皮の布片を取りつける。
	① 北海道	ミズキ・皮革／木綿		北海道アイヌ	ミズキと皮革で輪が作られ、木綿の布片がつけられる。
	北海道	ミズキ・ビニール		北海道アイヌ	前頭部に熊の木彫りがつけられている。
	北海道(虻田)	ヤマブドウの皮		北海道アイヌ	ヤマブドウの皮製。側面に削り掛けがつく。上部にはサメの下顎骨が結わえられている。
	北海道(虻田)	ブドウ蔓・ミズキ			ブドウ蔓で幅細めに網、その輪の周囲に縄を網目状に飾る。前頭部には動物の木彫り(全体像)が取り付けられる。
	北海道(旭川)	ミズキ		北海道アイヌ	旭川の門野ナンケアイヌから入手したもの。幅が細く前頭部分に木型が残る。
	北海道(旭川)	ブドウ蔓・ミズキ		北海道アイヌ	旭川の門野ナンケアイヌから入手したもの。ブドウ蔓で輪の土台を作りその上にミズキを削って振ったものを厚く取りつける。
	北海道(旭川)	ガマ		北海道アイヌ	佐々木長左衛門が収集したもので、細めに輪が編まれ、周囲を縄で装飾される。
	樺太	オヒョウ・木綿		樺太アイヌ	オヒョウで細めに輪が作られ頭部を十字で編まれる。
	樺太	削り掛け・白木綿		樺太アイヌ	削り掛けで幅広に輪状に編まれ、頭部を十字に囲む。後頭部に削り掛けの束がつく。
	② 樺太	オヒョウ・木綿		樺太アイヌ	後に長いタレがつく。
	樺太			ニブフ	後頭部に長く冠の素材が輪と並行に束ねられる(垂れていない)。
	カラフト	削り掛け・木綿・人絹		ニブフ	シャーマンの被り物か? 後頭部に長く削り掛けの束がつけられる。束ねる時に布片が使われる。
笠	③ ナーナイ		1970年	シャーマン	アイヌの冠に似ている。
	① 樺太	樺		樺太ウィルタ	表白樺の外皮を地とし、樺皮の内皮で文様を施す。竹で縁取りし簾でかがる。
	サハリン	白樺樹皮			柄なし。
	② ナーナイ／ロシア	白樺樹皮			柄なし。
	② ナーナイ／ロシア	白樺樹皮			柄あり。黒地に白の模様。
	③ ウリチ／ロシア	白樺樹皮			柄あり。白地に黒の模様。
	④ オロチ		1962年		柄なし。

笠	△	沿海地方	樺			明治18年博物館に寄贈。表面は白樺の外皮を地として、黒く染めた樺皮で渦巻き状の装飾を作り縫いつけていく。緑を簾でかがる。
			樺皮			柄なし。
編み笠 (巻き)		北海道	テンキ草		北海道アイヌ	明治8年博覧会事務局引継。テンキ草で巻き上げて作る。
鉢巻	①	サハリン西海岸、マウコ村	フトイ（植物）・木綿・小木片付き		男性	フトイを編んで木綿布で装飾。小木片付き。
		サハリン西海岸、マウコ村	毛皮製・小ガラス青玉付き		女性	冬の鉢巻。
		サハリン西海岸、マウコ村	スゲ製		女性	スゲだけで編まれた物。細め。
		サハリン西海岸、マウコ村	オヒョウ・毛皮・シナ・木綿		女性	オヒョウ地に毛皮、シナ紐、木綿布で装飾。
		サハリン西海岸、マウコ村	ブドウ蔓・木綿・木片・青玉		女性	ブドウ蔓を編み、木綿布で装飾。
		サハリン東海岸	テンキグサ・木綿・		女性	テンキグサ製の台に木綿布で縁取り。
		サハリン西海岸	木綿・削りかけ		女性	木綿製、上下に削りかけつき。
		サハリン西海岸、マウコ村	黒ビロード・小木片		女性	黒ビロードに刺繍、小木片付き。
		サハリン東海岸	赤・黒木綿・		女性	鉢巻の中央に小さな布飾り。
		カラフト	婚木綿・絹・ビーズ		カラフトアイヌ	礼装用。
鉢巻 (樹皮)	②	北海道	樺樹皮			樺樹皮製、着色、文様付き。
鉢巻(輪)	③	サハリン／ウムラウフ	木綿・キルティング	1907年	装着に男女別なし	木綿布を輪状にとじ合わせ、全体をキルティングしている。
		サハリン東海岸	木綿・絹（一部）		シャマン	鉢巻状、カラフルで、柄紋の生地も一部使用。一部絹使用。
		サハリン西海岸、マウカ村	黒ビロード、小ガラス玉		女性	装飾に小ガラスを多数つける。
		サハリン東海岸	木綿			カラフル、アイウシ文等、刺繍文入り。
			木綿			表は黒、裏は白。中側に厚紙の芯をいれ輪にとじる。文様はあらかじめ施し、合わせてから、ビーズ等の装飾をする。
						黒の光沢のある布、切り伏せ、鎖縫で波状の文様、こま縫。
			木綿			表は黒、裏は大渡職の木綿。厚紙の芯をいれ、輪状にとじる。文様は色系で大きな千鳥がけ文様。
鉢巻 (縛る)	④	北海道	オヒョウ・木綿	1873年		紺と水色の木綿糸で刺繍。ほつれ止めに紺木綿で覆輪を施す。結び紐はオヒョウの平織り。ウィーン万博出品。
		北海道	別珍			幅広で縛るタイプではなく端をピンで留めるタイプのもの（新しい作品）。
		北海道	黒木綿			前頭部分に粗い針目で刺繍が施される。
		北海道（旭川）	黒木綿			製作は杉村フサ氏で、アイヌ文様が前頭部分に施される。
		北海道（旭川）	別珍			製作は尾沢チヨ氏で、前頭部分に刺繍が施される。
		北海道（旭川）	別珍			製作は清水キクエ氏で、幅広目の別珍鉢巻の前頭部分に刺繍。

鉢 卷 (縛る)		北海道 (旭川?)	黒木綿・紺木綿			製作は阿地政美氏で、鉢巻の中央部分が幅広く端は細い。前頭部分に刺繍。
		沿海州、日本(主に北海道)	オビヨウ、木綿			オビヨウ製、黒木綿を被せ刺繍。縛り紐付き (オビヨウ)。
			木綿			色糸の鎖縫で文様が施される。中心が幅広く山形状。縛り紐は別布。
						ウィーン万博出品。オビヨウ樹皮に刺繍文。縁取り。縛り紐付き (オビヨウ)。
			オビヨウ・			オビヨウ樹皮編み、刺繍縁取り。縛り紐付き (オビヨウ)。
鉢 卷 (帽子)			木綿・ビーズ		坐者用	黒の木綿に色糸で刺繍。鎖縫の文様、ビーズ飾り。頭頂部には光沢のある黒布が十字に縫いつけられる。中心に、円盤状の飾りと四方に色布とビーズが装飾、房が付く。
頭 巾 (① 平面的)		北海道	木綿	1889年	子供用(短い)	格子木綿と縹木綿で厚手。頭頂部に房付き。
		北海道	木綿	1879年	短い	紺木綿で裕の頭巾。浴衣地、色布、刺繍を施す。頭頂部に共布で房をつける。
		北海道	木綿・オビヨウ	1889年	短い	紺木綿の表、オビヨウに木綿を織り込んだアットウシの裏。防寒用。刺繍と染め緋で文様入り。後頭部を刺し子で補強。
		北海道	木綿・ブドウ蔓		男性用	刺繍文。頂部はブドウ蔓を包む。後頭部下に三角マチ付き。
		北海道	オビヨウ	1873年以前		狩猟・防寒用の頭巾。紺と水色の木綿糸で刺繍。頭頂部にアットウシで三角形の房付き。木綿布で縁取り。ウィーン万博に出品。
		北海道	オビヨウ		北海道アイヌ	上記と同じで形でオビヨウ製。刺繍の文様は違う。縁取りされる。
		北海道	木綿		北海道アイヌ	明治8年博覧会事務局引継。茶地縹木綿切伏せ刺繍文。後部に三角布の房を補い刺繍。後頭部に房飾り。紐飾りをつけ前部分にも紐あり。
		北海道	木綿		北海道アイヌ	明治8年博覧会事務局引継。紺地木綿刺繍文。上部と後部に三角布を刺し子に作り肩部分後部に刺繍を施す。房飾りと前部に紐あり。
		沿海州/北海道	木綿			後頭部下に三角マチ付き。刺繍入り。頭頂部に房付き。
	②	ナーナイ/ロシア	布製		子供	マントのよう。長め。後部下に切り抜き文様入る。裾周りがフリンジ状。
	③	ウデヘ/ロシア	布製			形が北海道の頭巾に似ている。後頭部下に文様。
		モンゴル	フェルト			2002年製作で、周囲をバイピングし、あご下部分で紐で縛る。
頭 巾 (④ 立体的)	④	サハリン東海岸	木綿・琥珀玉・ガラス玉		子供用	頂部に琥珀玉とガラス玉が付く。
		サハリン東海岸	木綿・小玉			頂部に刺繍、小玉付き。
	⑤	ウデヘ/ロシア	布製	1960—1970年	男性	男性の狩猟用。縁をバイピングされる。
帽 子	▽	サハリン/フォンリッター	木綿・狐の毛皮	1902年	男性	紺木綿の表、内側に狐の毛皮が張り付く。地布に木綿の色布をおく。刺繍。頭頂部に綿入り紐2本を複雑に結んだ12cmの飾り付く。スマリハハカ(狐の帽子)と呼ばれる。

帽子	▽	サハリン／ヤコブセン	木綿・獣皮	1884年	男性	紺木綿の表地の内側に獣皮を貼り、全体をキルティング。耳覆い付き。内側に毛皮付き。頭頂部に紐2本結んで飾り。後頭部は折りかえし額の結び紐の先端に色布をおき刺繍。
		サハリン西海岸、マウカ村	木綿・綿・毛皮			綿状の詰め物をした木綿製。毛皮で縁取りをする。
		サハリン西海岸、マウカ村	木綿・獣皮			冬の帽子。頂部に獣毛の詰め物。
		▽サハリン東海岸	木綿・ガラス玉		女性用	木綿製で多数小ガラス玉で装飾。
		サハリン	木綿・柄木綿	1907年		防寒用。全体が厚手のキルティング。内側に耳や頬を覆うための花柄の木綿布をつける。かなり深め。
		サハリン	木綿・ビーズ	1907年		防寒用。厚手のキルティング。内側に耳や頬を覆うための布がつく。頭頂部には綿入りの紐2本を複雑に結び飾り付け、折りかえし部部にはビーズで装飾。中国・モンゴル系統に形が似ている。
		サハリン	木綿・			明治16年に博物館に寄贈。表裏木綿。全体に綿を入れ百重刺する。中央に房をつけ、四方に赤・淡青の装飾裂を垂らす。
			木綿・ビーズ		女性用	防寒用の帽子。全体に綿入れ黒の木綿糸でキルティング。頭頂部は綿の入った紐が結びつけられる。先端にビーズがつけられる。折りかえし部分には波形のコシンプルと呼ばれる文様が刺繍。
			木綿・ビーズ	1965年	女性用	防寒用の帽子。全体に綿入れ黒の木綿糸でキルティング。頭頂部は綿の入った紐が結びつけられる。先端にビーズがつけられる。折りかえし部分には波形のコシンプルと呼ばれる文様が刺繍。全体に中綿入り、黒い綿布に刺し子状に刺繍。後部は色布とビーズ装飾。頭頂部から四方に房が垂れる。刺繍はカラフル。
			木綿・綿・アザラシ毛皮		男性	防寒用。黒の綿布全体に中綿入り。刺し子状に黒木綿糸でキルティング。頭頂部には綿の入った紐を結んだ飾り付き。カラフルな布で切り伏せと、刺繍。折りかえし部分にアザラシの毛が使われる。
			木綿・狐の毛皮			冬の帽子。頂部に獣毛の詰め物。木綿でつくり一部は百重刺し。頭頂部は綿入れの飾り紐。耳覆いの部分は内側に狐の毛皮を縫い込んである。
			木綿・綿・アザラシ毛皮・ガラス玉		男性	防寒用。黒の綿布全体に中綿入り。刺し子状に黒木綿糸でキルティング。頭頂部には綿の入った紐を結んだ飾り付き先端にはガラス玉がつけられる。折りかえし部分にアザラシの毛皮使われ、裏側はアイウシ文で刺繍。
帽子	▽	サハリン	削りかけ・鯨髭・木綿	1884年	男性用	削りかけをよって編み上げたもの。つば付き。頭頂部の装飾と底から縁に向かう6箇所透かし彫りのある飾り板には、鯨髭を用いる。補強にもなる。木綿のあご紐。
		サハリン	削りかけ（柳樹皮）			つば付き。頂部に柳の樹皮装飾。

帽子	▽3	ロシア	トナカイの毛皮		子供用	模様入り。トナカイの毛皮製。あごの下で結ぶ。
帽子	▽4	サハリン東海岸	鳥羽・木綿			鳥羽製、木綿布を裏につける。両脇に紐付き
		サハリン西海岸、マウコ村	鳥羽・オヒョウ			鳥羽製、内側はオヒョウ樹皮。
	▽5	北海道	ミミズクの羽毛			水鳥皮製、腹部を使用。
帽子	▽6	カラフト	トナカイ毛皮		カラフトアイヌ	耳宛がつき、外側がすべて毛皮である。
		カラフト	トナカイ毛皮・木綿		カラフトアイヌ	耳宛がつき、外側が毛皮で内側が木綿。
	▽7	ウデヘ／ロシア	木綿			布製、両脇から紐付き。頭頂部にボール状の房付き。
		ウィルタ	トナカイ皮・木綿		カラフトアイヌ ウィルタ	かなり長い耳宛がつく。外側に毛皮。
	▽8	ウィルタ	木綿	1988年 制作	女子用	形が中国・モンゴル系。ウィルタの刺繍入り。
		オロチョン	フェルト・木綿・毛			内側が毛皮。
	▽9	オロチョン	シカ・ノロ・キツネ・ヤマネコ			子供用でつばがある。毛皮をつなぎ合わせている。
	▽10	ニブフ	トナカイ皮・ウサギ皮		カラフトアイヌ ニブフ	かなり長い耳宛がつく。外側に毛皮。
	▽11	ナーナイ／ロシア	毛皮		男子、子供	毛皮製、両脇から紐付き。頭頂部にボール状の房付き。
		ナーナイ／ロシア	木綿・毛皮		子供	縁に毛皮がつく。
	▽12	ウリチ	毛皮	1960年		顔周りや側面もすべて毛皮。
	▽13	コリヤーク／ロシア	トナカイ毛皮	1996年 収集	子供	耳あてつき。
		コリヤーク／ロシア	毛皮	1960年	男性	頭部の形が四角、内側が毛皮。房付き。文様付き。
		コリヤーク／ロシア	トナカイ毛皮	1960年	男性	頭部の形が四角、内側が毛皮。房付き。文様付き。
		コリヤーク／ロシア	毛皮			頭部の形が四角、内側が毛皮。房が多く付く。文様付き。
		コリヤーク／ロシア	毛皮	1950年	男性	頭部が四角いが膨らみはなし。房飾りが少し付く。
		コリヤーク／ロシア／カムチャッカ	トナカイ毛皮	1998年		夏用かぶりもの。紐付き。

資料3 アイヌ絵にみる“かぶりもの”一覧

項 目	作 者	作 品 名	描写年代	備 考
礼 冠	秦檜磨	蝦夷島奇観	1799年	編まれたもの。男性盛装の図として描かれる。前頭部に何もついていない。後も短い。
笠	小玉貞良	アイヌ盛装図	1700年代中期以降	植物で編まれたと思われる笠を被っている。異国風。
	松田傳十郎	北夷談より		柄あり 山丹笠。
	小林豊祥	蝦夷カラフトサンタン打込図	1792年	様々な器物や数種類のアイヌの住まいが詳細に描かれている巻き物で、実物の1に類似。「笠」と描かれている。
			1799年	
	間宮林蔵	東韃地方紀行より	1808年	中国人系の人々が笠を被っている。
	PAR AUGUSTE WAHLEN	MOEURS USAGES ET COSTUMESより	1845年	カラフト系の着物を着た男性が先の尖ったものを被っている。先に房のような物がつけられる。
		夷舟乗合之図		蝦夷舟に数人のアイヌが乗っているが人物は貞良風に描かれている。満州風笠を被っている。
鉢 巻	小玉貞良?	蝦夷国風図絵	1700年代初期	男性が文様の入った鉢巻をしている。
	温古齋 殷信	蝦夷國語男女之図	1700年代後期	男性が文様の入った鉢巻をしている。
	三宅嘯山	アイヌ人物図	1792年	男性がカラフト2の物に似た鉢巻をしている。クナシリアイヌを描いている。
	平澤屏山	アイヌ風俗十二ヶ月屏風	1872年から1876年の間	「6月 昆布採りの図」の中で男性が鉢巻をしている。
	林頭三	北海紀行 胆振国山越内土人村長ヘビッケ之像	1873年	手ぬぐいらしきものを被りその上を押さえるようにマタンブシで巻き締める。
	不明	マタボシ	江戸末から明治初期?	マタボシ（マタンブシ）樹（ニガキの一種）の皮を削ってつくる。合わせ目を前に向ける。またぬいつけたものもある。これは鉢巻の一種で前でむすぶものもある。両端は紐のように細くなっている。
	不明	老婦人図	江戸末から明治初期?	被り物（ホカムリ）の注記があるが図の女性は鉢巻をしている。
	木戸竹石	アイヌ熊狩之図	明治以降	アイヌ男性は礼冠と鉢巻を被る。女性達も輪状の鉢巻をしている。（輪帽ともいう）作者は明治中期から大正にかけて熊送りを題材にしたアイヌ絵を多く出す。カラフトアイヌに見られる被り物が見られる。
頭巾・鉢巻	不明	大漁の図（談笑図）	江戸末から明治初期?	男性は房付きの帽子を被り、毛皮の肩掛けを羽織る。女性は鉢巻をし、首にチョウカーを巻いている。
頭 巾	村上貞助	「北蝦夷地部」の挿絵	1808年	樺太独特の風俗を示す。樺太風の丸みある頭巾のようなものを被っている。
	秦檜磨	蝦夷生計図説	1823年	頭巾を被っている。
	平澤屏山	雪中出獵のアイヌ	1872年から1876年の間	コンチという刺繍した頭巾を被り、この頂点には赤緑赤の三片の三角色布（コンチブサといい有婦の印であるという）がついている。

頭巾	平澤屏山	瀑布前	1872年から1876年の間	頭巾を被っているが額と両頬とを覆う外下は開いている。青緑赤三片のコンチブサがついている。
	松浦武四郎	近世蝦夷人物語	江戸末から明治初期	頭巾を被っている。
	不明	アイヌ風俗絵(スケッチ画)狩猟図	江戸末から明治初期?	弓を構える人物は腰に山刀をさしている。頭巾を着用か?
	不明	夫婦山行図	江戸末から明治初期?	四景とも房付きの帽子を被る。上から二段目の男性は毛皮の手甲をつけている。
	不明	狩猟図	江戸末から明治初期?	弓を構える人物は腰に山刀をさしている。頭巾着用か?
	不明	頭巾について	江戸末から明治初期?	前方ことば(?)は色あり 後方ものは付けない。およそ二、三寸(6~9cm)ほど縫い合わせ、上のほうは縫わずに髪を出すように被る。アツツシの生地の上にも刺繍をする。被るときはあごより一寸(3cm)ほど下にする。内側に紐があり一本は短く、もう一本は長い。男性用のものには長短はない。長いのは左で右のものは短い。アイヌの女性はホカムリ(頬被り?)といっている。頭巾のことで男性用とは異なっている。
	不明	イナウを持つ男性と夫婦図	江戸末から明治初期?	左側の夫婦図の男性は左衿で頭巾状の帽子「コンチ」を被っている。
	不明	水鳥の狩猟・柴すべり	江戸末から明治初期?	頭巾は被る。ホッカブリ風。
	不明	※	江戸末から明治初期?	男性は頭に頭巾を巻いた感じに描かれている。笠みたいなのもあり。中国の人とも描かれているように見える。
帽子	間宮林蔵	東韃地方紀行より	1808年	中国人系の人々がつばのある帽子を被っている。
	林頭三	北海之土人養熊之図	1873年	女性は手ぬぐいを巻き、男性は山丹の帽子のようなものを被っている、彼らは中国大陸や沿海州の人かもしれない。
	無落欵	蝦夷酋長之図		纏えるは山丹渡来の蝦夷錦、被るは同じく韃靼風の帽子であり、樺太の酋長でもあろうか、耳輪飾りも単純ではない。
	不明	狩猟図	江戸末から明治初期?	小札状の帽子を男性が被る。アイヌでは見られない形。中国風の頭巾。
	千島春里※	エゾイワイノヅ	1800年代初期	「エゾイワイノヅには五人の男子と、女子どもが一人づつ描かれ、手の手頸のみでなく頸頬の下部に交叉した入れ墨が見られる。これは例外らしい。女は頭髪をモシヤモシヤしている。」英人マツクリチェ氏述べる。かぶりものはしていない。
	早坂文嶺※	鹿猟之図	1800年代中期	アイヌは肌に毛衣をつけ、その上に草で織った鎧(ハヨクベ)を着用し、背に矢筒を負い足袋をはいている。額は剃り上げ目は鋭い。千島アイヌであろう。マツクリチェ著「アイヌ」かぶりものはしていない。
	早坂文嶺※	熊送りの図	1800年代中期	かぶりものはしていない。

資料4 礼冠



※ 蝦夷島奇観：秦憶麿著（1800）より

たようである¹⁵⁾。

19世紀半ば蝦夷地を探検した松浦武四郎が『久摺日誌』に以下のように書かれている¹⁶⁾。

「笠 柳を削是を麻にて編みし物也。其上へ鯨の髭を附、力をもたらすなり。」

この笠を作っていたのはアイヌの老人で、自分のものとして作っていたのかは定かではない。

また、ユーカラの中から「蘆丸」別伝に、笠に関しての説明として、

邦語、かさ（笠）の輸入語。但し、後世の菅笠編み笠などのような大きな物でも日曜具でもなく、本当の武装の時の金時絵など漆塗りの小型のもので、兜にあたるもの。アイヌには大陸から渡ってきて蝦夷の武器になったのがはじめだった。それが和製のものに変わって大事な武具の名前になっていった¹⁷⁾。

と記されているが人々の交流により、アイヌの人々に「笠」という名称や使われ方、作り方なども伝わっていったと考えられる。

樺太・アムール地方で多く見られ、素材も白樺などの樹皮を用い、文様も樺太・アムール地方によく見られるものが施されているのも特徴である。降雨・雪などを防ぐ為と旅行用などに用いられていた。

アムール川周辺での山丹交易で樺太を経由し、交易品として蝦夷地にもたらされたことは確かであり、道内でも唐人笠のように異国風なものが多く見られていた。

2-3 鉢巻

マタンブシと呼ばれ、近年飾り鉢巻として男女ともにつけられている。

最初、男性だけが山獵に行くときなど髪 of 乱れを押さえるために使用されたととも言われる。

髪 of 乱れが悪魔を誘うと言い伝えられていた。女性が鉢巻をするようになったのは、髪 of 乱れを防ぐためと、これまで男性 of 盛装時 of 被り物が礼冠とされていたが、鉢巻は女 of 礼装に用いられるようになったとも考えられる。女性 of 鉢巻はチエパヌフという。

アイヌの人達 of 生活を描いたアイヌ絵に鉢巻がよく見られる。ここでは柄 of 鉢巻は見られず、無地 of のものである。江戸時代中期 of 風俗を示したもので、浄瑠璃を踊っている様子が描かれるが、鉢巻(チエパヌフ)している。(資料5)

ドイツ of 医学者ショイベが明治13年長万部で現在 of 女 of マタンブシと同じ文様つき of のものをみて、女 of 鉢巻と図示記録している¹⁸⁾。

最初文様が入ったものは男性用であったが、おそらく明治初期頃着物 of 文様も多く施されるようになった頃から女性も文様入りを巻くようになったと考えられる。

形・文様・色・素材に差異が見られる。

素材は無地 of 黒木綿が多く、交易によって無地 of 絹物、綸子、縞子などでも使われている。風呂敷状 of のものを斜めに折りたた形 of のものもある。さらに芯が入ったものや、切伏せされたものもある。

アイヌ民族誌によれば、締め方も前で結び目を作るか、後で作るか、垂れを残すか、巻き込んでしまうか等、地方によって異なり、地方差が見られる¹⁹⁾と書かれている。

例えば、近文地方で、鉢巻 of 風習は明治期に入ってから日高から嫁入りをしてきた女 of まねをして始めたといわれている。

樺太アイヌ of 鉢巻の場合、すでに輪状になっていて「輪状帽」と呼ばれる。寛永20年(1643年)オランダ of 航海者、フリース of 航海日誌に「美しい女がビーバー of 毛皮 of バンドをし、

資料5 鉢巻をして浄瑠璃を語っている。



※ アイヌ風俗略志：村尾元長著(1892)より

黒テンの毛皮のバンドをつけていた²⁰⁾と記されている。大型で、形・色彩が異なる。輪状の上を十字にバンドが渡らせられ、病人に被らせることもあったという。酋長が祈りを捧げる時にかぶり、シベリアのシャーマンに同じような形で金属製であるが樺太とにたものが見られる。

2-4 頭巾

頭巾というのはコンチのことを意味し、寛政4年「蝦夷方言藻汐草」に“帽、被り物、コンジ”といわれている。文政6年（1823年）J. クラプロートの語集「アジア・ポリグロッタ」にカムチャッカ、樺太のアイヌ語の中にコンヂ（帽子）²¹⁾と集録されている。

一覧表からも北海道には頭巾が多く見られ、アイヌ絵（資料6）（資料7）からも被っている様子が見られる。

本州からの頭巾をそのまま使用することもあった。主に防寒のために着用され、男のコンチは女から男への贈り物で、木綿や樹皮で作られている。北海道のものは本州の山岡頭巾に似た角形で、背面部にマチがはいっている。全体もしくは一部に切伏せ文様を入れ、後頭部突出部にコンチプサという角形の布を三角状に折りたたんで置く。連らねたものは女房もちの象徴とされた。房の中には芯として削りかけが入れてあり、地方によって房の数や色は色々あり、目印でもあった。

他に子供用として全体に大きさも小さく、文様も大人のもののほど入らない。文様を省略する一方、魔除けの飾りは必ずつけた。つける物としてうさぎの耳、耳の黒い部分、ウサギの毛、布袋に入れたウサギの毛を紐や糸にとおして二個下げるといことが言われる。ウサギの毛には呪力があるわけではなく、うさぎそのものが魔物に対する超能力を有するというのである。子どもは弱い存在で悪霊がつきやすいと考えられていたため、子どもの道具や衣類には必ずお守りや魔除けなどがつけられることが多かった。

女性の防寒用と、「チシコンチ」といって夫が死ぬと喪の間妻が被るコンチもある。黒布で作られる。地方によってはあり合わせのコンチを裏返しに被るという事もある。

樺太アイヌのものも防寒用で形は直線裁断の北海道の頭巾と異なり丸い形状で立体的である。素材は北海道と同じ木綿で中に綿が入るのが特徴である。その上から刺し子風に全体が返し縫いされる。また、裏側に毛皮をとりつけたものも見られる。頭頂部に綿の入った丸いプサ、紐が『トンボ結び』に似た形状に結ばれ、十字状につけられる。

北海道の頭巾と共通して頭頂部分に房がつけられることは、同じように魔除けの為や、種類によって目印的なものと考えられる。

資料6 男性が頭巾をかぶり、女性が鉢巻をしている。



※ 11) より

資料7



※ 11) より夫婦山行図

資料8 小札状の帽子を男性がかぶっている。



※ 11) より

2-5 帽子

北海道アイヌにはほとんど見られない。道内での生活を描いたアイヌ絵（資料8）に先が尖った被り物をしている人物が描かれている。この人物は、北海道アイヌではなく、中国系の民族にも見られる。交易などを理由に道内に樺太・アムール川周辺民族が見られ、さらに中国大陆の民族も道内で痕跡を残していたのである。

樺太を中心にアムール川周辺地域で多く見られ、収集地に差異があっても形に差異があまり見られない。素材は木綿の他、鳥羽や毛皮類が多く使われている。綿が中に入り文様とあわせてキルティングされたり、表面にビーズの装飾も見られる。

つばのある帽子では、樹皮を編んで、補強と装飾をかねて鯨髭で縁取りをしている。鯨髭には大漁を願って魚の透かし彫りを施したとも言われている。

一覧表から帽子はかぶりもののなかでも一番多く収集されている。しかし、考察するためには使用年代も明治以降で比較的新しいもので、これまでのかぶりもののように歴史的背景があさく、同等に扱って検討していくのが難しい。

結 論

以上のように、実物資料や文献を参考とし聞き取り調査をあわせて、北海道アイヌを中心とした“かぶりもの”について、その種類と使用地域の分布についてとりあげた。その結果次のようなことが明らかとなった。

- ① 気候風土や生活習慣のそれぞれに異なる地域では“かぶりもの”の種類も異なり、その用いられる素材も相違が見られた。北海道アイヌの場合、和人との交易から木綿を多く入手できたので、頭巾や鉢巻が多い。一方、樺太やアムール川周辺地域では、北海道より極寒な気候でそれに対応するため毛皮の使用が多く見られた。
- ② 北海道内の交流がみられる地域では“かぶりもの”の種類や形状がそれぞれに類似する要素を含んでいた。
- ③ 冠の前頭部の彫り物や頭巾の形状や被り方を変えることにより、目印的な意味合いを持ち、使用する対象者が区別された。
- ④ アイヌ民族の場合、頭巾の頭頂部の房には呪術的意味を持つことがわかった。

口承伝承であった彼らにとって自己をかぶりものの形状や使い方から表現することは、言葉で表現できない分、視覚の能力が大変発達している民族が作り上げてきた文化であることが言える。このことは、従来アイヌ民族衣服の多彩な色彩や文様の形から研究されてきたが“かぶりもの”から研究を進めたものではなく、今日で明るみになったのではないか。

アイヌの人たちに聞き取り調査を行っても、アイヌ文化について詳細を語れる人は減少しているのが実際のところである。

アイヌ民族の文化史研究は上記の民族的特徴により研究資料は少なく、多種多様に比較検討することが困難であることは今回の研究でも痛感した。このように資料の行き詰まりを感じる中で今回はじめて提供され、公開を許されたアイヌ絵²²⁾を用いて使用年代等を推測して

きた。未開拓の資料を発掘し調査できたことは、大変価値あることでこれまでのアイヌ文化の研究を再認識したと同時にこれからの研究の重要性と方向性を見いだすことができたのである。

引き続き、アイヌ民族衣生活の研究を、まだまだ明るみにされていない資料の発掘と貴重な聞き取りを続け、残存する実物資料、文献、目録等から進めていきたい。

謝 辞

本研究にあたり、資料の調査協力、ご助言をいただいた旭川市博物館、小樽市博物館、苫小牧市博物館、北海道開拓記念館、北海道立北方民族博物館、アイヌ民族博物館、弥永北海道博物館、静内アイヌ民俗資料館、シャクシャイン記念館の学芸員の方々、道立アイヌ民族文化研究センター、北海道立図書館の職員の方々に心より御礼申し上げます。

注

- 1) アイヌの民族衣服における文様の呪術的要素と地域差：諏訪原貴子、鷹司綸子 和洋女子大学紀要第42集(家政系編) 181-195 (2002)
- 2) 民俗民芸双書24 かぶりもの・きもの・はきもの：宮本馨太郎著 岩崎美術社 55 (1968)
- 3) かぶり物 昔と今：岡田全弘著 東京エディトリアルプロダクション 177-178 (1962)
- 4) アイヌ叙事詩 ユーカラ集 IX：金田一京助筆録 三省堂 (1975)
- 5) 4) 54
- 6) 知里真志保著作集 別巻Ⅱ分類アイヌ語辞典 人間編：知里真志保著 平凡社 (1954)
- 7) 6) 27
- 8) 6) 109-112
- 9) アイヌ民族誌(上)：アイヌ文化保存対策協議会 第一法規 (1969)
- 10) 北海道立北方民族博物館資料目録2 アムール流域の人々：北海道立北方民族博物館編集 財団法人北方文化振興協会 (1999)、旭川市博物館所蔵品目録Ⅹ民族資料／服飾関係：旭川市博物館、北海道立北方民族博物館資料目録3・4・5・7 民族資料目録1～4：北海道立北方民族博物館編集 財団法人北方文化振興協会 (1999～2003)、東京国立博物館図版目録 アイヌ民族資料編：東京国立博物館 (1992)、ロシア科学アカデミー人類学博物館所蔵アイヌ資料目録：ロシア科学アカデミー人類学博物館 (1998)、アイヌ工芸作品展『テケカラベ 女のわざ ドイツコレクションから』：アイヌ民族博物館 (1999)、樺太アイヌ 児玉コレクション：アイヌ民族博物館 (1996)
- 11) 描かれた岸辺のアイヌー旅の絵師がのこしたスケッチー：小樽市博物館 (2005)

※2005年7月16日から9月25日まで開催された、第57回小樽市博物館特別展の企画で、初めて紹介されたものである。

- 12) 蝦夷島奇観：秦憶磨著（1800）
- 13) 北海土人画譚：前野長発著（1898）
- 14) アイヌの衣文化：岡村吉右衛門著 衣生活研究会 257（1979）
- 15) 描かれた近世アイヌの風俗：財団法人アイヌ民族博物館 29（1994）
- 16) 蝦夷日誌集 第二：正宗著 147（1929）
- 17) アイヌ叙事詩 ユーカラ集 Ⅷ：金田一京助筆録 三省堂 146（1968）
- 18) 9）283
- 19) 9）272-281
- 20) 9）272
- 21) 9）270
- 22) 11)

参考文献

- 1) 東韃地方紀行：間宮林蔵著（1808）
- 2) 北夷談：松田傳十郎著（1822）
- 3) 近世蝦夷人物誌：松浦武四郎著（1860）
- 4) アイヌ風俗略志：村尾元長著（1892）
- 5) アイヌ絵誌：越崎 宗一著 北海道出版企画センター（1959）
- 6) 日本庶民生活史料集成第4巻：高倉新一郎編著 三一書房（1969）
- 7) アイヌの衣文化：岡村吉右衛門著 衣生活研究会（1979）
- 8) 装いのアイヌ文化誌 北方周辺域の異文化と共に：河野本道著 北海道出版企画センター（2001）

諏訪原 貴 子（家政学部服飾造形学科助手補）

鷹 司 綸 子（家政学部服飾造形学科教授）